

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11028

研究課題名（和文）人工妊娠中絶の看護を行う看護師の実践の知

研究課題名（英文）Practical knowledge of nurses providing induced abortion care.

研究代表者

勝又 里織（Katsumata, Saori）

杏林大学・保健学部・教授

研究者番号：00514845

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、妊娠初期の人工妊娠中絶術（以下、中絶とする）を受ける女性の看護におけるルールや看護師の行動パターンを明らかにすることを目的とした。無作為抽出した全国の中絶実施施設に勤務する看護師（助産師、看護師、准看護師）にWebにて調査を実施した。177部回収（回収率17%）し、有効回答173部（97.7%）を分析対象とした。

その結果、看護師は中絶に関わる話題については触れず、その件に関する関わりを最小限にとどめるようにしていた。看護師の日常における中絶の看護に関する18項目のうち、2項目を除いては有意差が認められた。また、看護師自身が傷ついていても、仕事として割り切る等して看護を実施していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日常の中絶の看護について、18項目中16項目に有意差が認められ、中絶の看護におけるルール及び行動パターンが少なからず明らかになった。一般に、中絶の看護については実践の場で学ぶしかなく、手探りで看護を行っている。これらの結果の公表は、多くの看護師の役に立つものと考えられる。

また、中絶の看護を行う看護師は自分自身が傷ついていても、『中絶について善悪の判断をしない』『どんな状況でも仕事として割り切る』等、感情は切り離して看護に携わっていた。よって、中絶を受ける女性だけでなく、看護に関わる看護師の傷つきを最小限にするためにも、関わるだけでなく、「関わらない」という関わり方も必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the rules and behavioral patterns of nurses in the nursing care of women undergoing early pregnancy induced abortion. We randomly selected facilities within the country that perform abortions and conducted a survey among nurses. The survey was conducted online. We collected 177 responses (a response rate of 17%) and analyzed 173 valid responses (97.7%).

As a result, nurses tended to avoid discussing topics related to abortion and minimized their involvement in such matters. Additionally, among the 18 items related to daily nursing care for abortion, significant differences were observed in all items except for two.

Furthermore, nurses carried out their nursing duties in a professional manner even if they themselves were emotionally affected.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：人工妊娠中絶術 妊娠初期 女性 看護ケア 実践知

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では、年間出生数の約 20%にあたる中絶が実施されている。それにも関わらず、看護教育の中で取り上げられることは少なく、教科書にもほとんど記載されていない。特に、妊娠初期の中絶においては、研究もほとんど見られない。このため、看護師や助産師は、実践の中で各々学んでいくしかないのが現状である。中絶の看護を行う看護師や助産師は、日常、どのような看護を行っているのだろうか。中絶の看護に関する知識を得るためには、実際にそれを行う看護師から情報を得る必要がある。そこで、研究者は、2011年～2013年に、都内産婦人科診療所1施設において、中絶における看護について明らかにする研究を実施した(勝又里織. 人工妊娠中絶術を受ける女性と看護者のやりとりの場面に焦点を当てた看護に関する研究. 科学研究費補助金若手研究B(課題番号:23792657), 2011～2013年度)。その結果、中絶における看護は、「関わらない看護」であることが明らかになった(勝又里織. 人工妊娠中絶における看護のエスノグラフィー - 初期中絶における看護に焦点をあてて - . 日本看護科学学会誌. 2018, Vol. 38, pp. 37-45, DOI:10.5630/jans.38.37)。看護は、これまで、とかく相手との関係性を築くことやそのための関わりを持つことが強調されてきた。しかし、「関わらない看護」は、これとは異なる形態の看護であった。多くの発見が認められた研究ではあるが、研究実施施設が一施設であったことから、これらの発見がすべての施設に適用できるとは限らない。

そこで、本研究は、2011年～2013年の研究結果をもとに独自に質問紙を作成して、全国の中絶を実施する施設を対象に、質問紙調査を実施することを考えた。これにより、日本における中絶の看護が明らかになり、新たに、施設による看護の違いや課題が明確になる可能性がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中絶の看護におけるルールや看護師の行動パターンを明らかにすることである。

3. 研究の方法

看護は、2011～2013年度に実施した研究結果をもとに、独自に作成したアンケート調査(無記名)とした。データ収集はWebにて行った。

まず、全国の中絶(妊娠12週未満の中絶)を行う施設から無作為抽出した1,040施設(2022年度と2023年度の2回に渡り配布した合計)の看護師長宛てに「研究依頼書」とWebアンケートにアクセスするためのQRコードを掲載した「研究説明書」を郵送した。「研究説明書」は、院内のスタッフの目につく場所に設置頂いた。研究協力者は、日常中絶の看護をしている助産師、看護師、准看護師とし、書面に記載されている研究の趣旨に同意をしてくれた方に、QRコードからWebアンケートにアクセスをして回答してもらった。調査内容はデモグラフィックデータ及び日常行っている中絶の看護18項目とした。18項目については、「そうしている」から「していない」までの4段階リッカート方式で回答を求めた。分析は記述統計、studentのT検定及び分散分析を行った。本研究は帝京科学大学医療科学部研究倫理審査委員会ならびに杏林大学保健学部倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

2022年度のデータ収集では、回答者は77名であり、回収率は12.8%であった。そのうち、有効回答者は75名(97.4%)であった。その段階で一度分析を試みたが、データ数をさらに増やすこ

とでより一般化に近づけることを目指し、2023年度追加データの収集を実施した。2022年度に作成した中絶実施施設名簿の中から、調査を依頼していなかった440施設に対し、調査を依頼した。これにより、新たに101名より回答が得られた（回収率約25%）ため、合計177名、有効回答数173名（97.7%）を分析対象とした。

（1）回答者の背景

結果

回答者173名は、約7割が40代もしくは50代であり、助産師96名（55.5%）、看護師56名（32.4%）、准看護師21名（12.1%）であった。産婦人科外来および病棟での勤務経験は、21年以上が65名（35.7%）と最も多く、続いて11～15年が35名（20.2%）、16～20年が21名（13.9%）であり、約7割が11年以上の経験があった。中絶の看護の経験例数は51～100件が44名（26%）と最も多く、11～50件が41名（24.3%）、101～200件が26名（15.4%）と続いた。

（2）施設の概要

勤務している施設の種類は、129名（76.4%）がクリニック/診療所であり、26名（16.2%）が産婦人科単科で、96名（55.8%）が出産を取り扱う施設であった。また、施設に入院設備があると回答した方は103名（59.5%）であった。

（3）中絶に関連した事柄

中絶時の施設での滞在時間は半日が105名（61.0%）と最も多く、人工妊娠中絶を受ける患者への看護ケアマニュアルが「ある」と答えたのは71名（41.5%）であり、「ない」施設の方が多かった。

（4）日常の中絶の看護

看護におけるルールや看護師の行動パターン

看護者の日常における中絶の看護に関する18項目のうち、2項目を除いては有意差を認める結果であった。

日常行っている看護に関する18項目の質問については、「そうしている」から「していない」までの4段階および「答えたくない」で回答を求めた。なお、ここでいう「看護者」とは助産師、看護師、准看護師のことを表す。

その結果、『女性に赤ちゃんの泣き声が聞こえることや姿が見えないようにする』『予定通りに帰宅できるように時間通りに進める』『女性が決めたことには口を出さない』『強い口調にならないようにする』『訴えがなくても、身体の苦痛を感じ取る』等の項目で「そうしている」「まあそうしている」と回答する看護者が有意に多かった（ $p < 0.001$ ）。同時に、『中絶の理由や至った経緯など、詳しく聞く』は「あまりしていない」「していない」と回答する看護者が有意に多く（ $p < 0.001$ ）中絶に関わる話題については触れないようにしていた。

『あまり女性の目を見ないようにする』『会話を最小限にしている』『パートナーが付き添っていれば、精神面には関わらない』について、「あまりしていない」「していない」と回答する看護者が有意に多く（ $p < 0.001$ ）女性との関わりを意図的に制限することはなかった。加えて、『中絶について善悪の判断をしない』『どんな状況でも仕事として割り切る』ことについて、「そうしている」「まあそうしている」と回答する看護者が有意に多く（ $p < 0.001$ ）看護者としての任務を遂行しようとしていた。

日常の中絶の看護と中絶を受ける女性への看護ケアマニュアルの有無との関連

勤務する施設に、中絶を受ける女性への看護ケアマニュアルの産むと日常の中絶の看護と関係について、対応のないt検定を行った。その結果、18項目中『女性に赤ちゃんの泣き声が聞こえることや姿が見えないようにする』項目のみ、「そうしている」「まあそうしている」と回答する看護者が多く、有意差を認めた ($p < 0.001$)。

日常の中絶の看護と職種による違い

日常の中絶の看護18項目について、職種(助産師、看護師、准看護師)による差を確認するために一要因分散分析を実施した。しかし、18項目いずれも職種間での有意な差は認められなかった。

(5)自由記載欄のご意見

「精神面に対して、深く立ち入るようなことはしませんでした。表情や声のトーン、話し方で寄り添う努力をしていました。」「中絶のケアは手さぐりの事が多く、どういったケアが必要か勉強できる機会があれば良いと思いました。」「できる限り穏やかな態度や口調で接するようにし、手術や術後への不安を最小限にできる様に説明をしたり、声をかけたりする様にしています」「どのような理由であれ、目の前にいる患者さんの選択したことを尊重するように心がけています」等、ケアに対する困難感や手探りながらも女性のケアに努めていることが伺えた。その一方で、「中絶はあってはいけない事なのではないかと、教科書で看護を教える必要はないのではないかと思う」「受け持つ助産師の心身の負担はかなり大きいです。」等、看護者の中絶に対する考えや立ち会うことに伴う苦悩に関する記載もあった。

考察

今回、中絶の看護に関わる看護者は、中絶に関係する話題には触れないようにしながらも、『あまり女性の目を見ないようにする』『会話を最小限にしている』『パートナーが付き添っていれば、精神面には関わらない』について、「あまりしていない」「していない」と回答する看護者が有意に多かった ($p < 0.001$)。この結果は、先行研究の『関わらない看護』とは一部異なる結果であった。その理由として、『あまり女性の目を見ないようにする』『会話を最小限にしている』等の質問は、回答者にネガティブな意味で解釈されている可能性があり、質問の意図がうまく伝えられていないことが考えられた。

また、施設内にある中絶のケアに対するマニュアルについて、無いと回答した者が多かったことから、施設内でのケア自体が看護者個人に任されており、人によって差があることが推察された。加えて、内容の確認はできていないが、マニュアルがあると答えた看護者の方が『女性に赤ちゃんの泣き声が聞こえることや姿が見えないようにする』ようにしており、マニュアルの整備により、看護ケアに反映される可能性が考えられた。

今後の課題

2023年5月、わが国でも経口妊娠中絶薬が認可され、現在、条件の整った一部の施設で使用を開始している。現時点では、入院による使用が求められており、看護者の関わりが必要となるが、今後、諸外国のように自宅での使用が認められるようになれば、中絶の看護も変わる可能性がある。そのため、経口妊娠中絶薬を使用した中絶の看護についても研究をする必要があると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 勝又里織
2. 発表標題 人工妊娠中絶術の看護を行う看護師の実践の知.
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------